

○ 村田さんは、斎藤茂吉の短歌集「死にたまふ母」を読み、心を動かされました。そこで、村田さんは短歌を友だちに紹介するために、特に心に残った短歌を選びました。

【斎藤茂吉の短歌】

1

みちのくの母のいのちを一目見ん一目見んとぞただにいそげる

(大意)

ふるさとの東北で、今にも死を迎えようとしている母、その母が生きているうちに、せめて一目だけでも会いたいという一心で、ひたすら急いだのだ。

3

はるけくも峽のやまに燃ゆる火のくれなゐと我が母と悲しき

(大意)

遠くに見える山を燃やしている火の赤と、(今はもう亡くなった)母のことが心にしみてきて悲しいのだ。

2

わが母を焼かねばならぬ火を持てり天つ空には見るものなし

(大意)

亡くなった私の母を火葬しなければならぬ、そのための火を手を持ちながら見上げた空は(涙で)何も見えなかった。

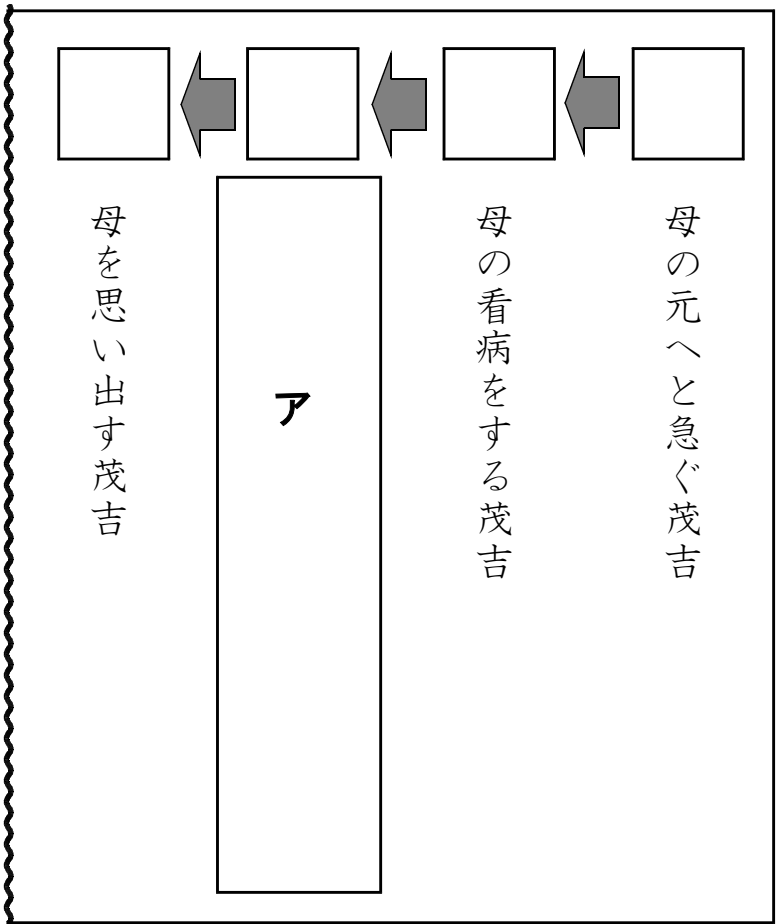
4

死に近き母が額を撫りつつ涙ながれて居たりけるかも

(大意)

間もなく亡くなるうとしている母の額をなでていると、自分でも気づかないうちに涙があふれてほほをぬらしていた。

一 村田さんは、「死にたまふ母」を紹介するメモをまとめました。



(1) 短歌の書かれた順を考え、□に1〜4の番号を書きましよう。

(2) アに入る見出しを、他の見出しの書き方に合わせて書きましよう。

また、そのように考えた理由を六十字以上八十字以内で説明しましよう。

(見出し)

(理由)

80字

60字

組

番

氏名